

二〇二〇年度 入学試験問題 帰国生

国 語

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから六ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙の解答らんに入入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らん
二行以上解答してはいけません。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

みなさんは、「自分」と「身内以外の他者」の関係をどう考えているでしょうか。身内以外の他者は、まったくの「赤の他人」にすぎないと考えているのではないのでしょうか。けれども、和辻哲郎（一八八九—一九六〇年）という日本を代表する思想家が強調したように、そもそも人間という言葉は、それが人と人との「間柄的な存在」であることを示しています。赤の他人であつても、社会生活を送るうえで他者との意思疎通をはかるために、⁽¹⁾ 公共的なコミュニケーションは不可欠です。

A、学校のクラスメートとは、友人以外であつてもなんらかのコミュニケーションをとらざるをえないでしょう。また、道を歩いているとき、自分の不注意で知らない人につかつかつたとしたら、その人に謝るのが当然でしょう。とりわけ、人間には誤解がつきものです。誤解が誤解を生んで互いに敵対しあうということは、大人の世界でも頻繁にみられます。そういう場合に誤解を正すことは、コミュニケーションの重要な役割です。

誤解を正すために腹藏なく話し合うコミュニケーションがうまくいかなければ、「疑心暗鬼」に陥ることもありまゝです。それは、疑う心があると、暗闇でいるはずのない鬼がみえてしまうように、一旦ある人に「フシンカン」をいだいてしまうと、その人の何気ない言動でもいろいろに勘ぐってしまふような状態をいいます。実際に人間社会で、そうした疑念が高じて喧嘩にまで、極端な場合には殺傷事件にまで発展することがまれではありません。けれども、あきらかに誤解が原因の疑心暗鬼は、コミュニケーションによって解消するよう努めなければなりません。さもないと、一人ひとりを活かすような社会など生まれるべくもないでしょう。みなさんも、「何だあいつ（あの一ひと）は」で始まり、「あいつ（あの一ひと）はいつも自分のことを悪く思っている」というパターンに進むような疑心暗鬼に陥ることがあるかもしれません。そのようなときは、自分の勝手な思い込みや間違つた噂の鵜呑みなどがないか、もういちど考えてみてください。そして心を閉ざさず、つねに相手とのコミュニケーションの可能性を開いて、解決していくように心がけてほしいと思います。

B 本来、他者との公共的コミュニケーションは、こうした消極的な役割を超えて、積極的なものにまで進むものでなければなりません。なかでも、公共的なことがらに関して「合意」を形成することは、コミュニケー

ションの重要な役割のひとつです。たとえば、学校の生徒会でなにかを決める時や、クラスでなにかルールをつくる時を思い出してください。たいいていの場合、先生が一方的に決めるのではなく、みんなが遠慮なく意見を出しあつて、合意にいたるケースが多いのではないのでしょうか。

それと同じように、大人の世界でも、滅私奉公でも滅公奉私でもないかたちで組織を運営するためには、コミュニケーションを通しての合意形成が不可欠です。「滅私奉公」型の組織や社会では、一方的に上から命令が下る上意下達でルールが決められます。しかしそのような決め方では、みんなが納得する公正なルールをつくるのは難しいです。新しいアイデアを生み出しにくくなることは、みなさんの日常生活をソウゾウしてもわかることでしょう。

C、「滅公奉私」型の社会では、コミュニケーションを通してのルールづくりについては、どうでもよいような無関心の雰囲気か漂うでしょう。残念ながら、学校生活においても、勉強だけしていればいい、あるいは話し合いなど面倒だ、という雰囲気になってしまつているところがあるかもしれません。それに対して、⁽²⁾ この本が打ち出した「活私開公」型の組織や社会を実現するためには、まず誰もが対等な関係を「センテイ」としてコミュニケーションをおこない、それに基づいて合意形成することが不可欠となります。

人によっては、このような合意形成は、西欧型社会に特有のもので、日本人は不得意だという異論があるかもしれません。つまり、日本では自分の意見を言わないことが美德とされており、徹底的に議論をたたかわすような文化は根づいていないという考え方です。しかし、私はそのような考えは間違つていると思います。なぜなら、⁽³⁾ 近代日本においてわき起こつた★自由民権運動や★大正デモクラシーは、まさに、人びとが対等なかたちでコミュニケーションをとりながら合意形成をめざす運動であつたと思うからです。そうした運動が弱まつたり忘れられたりしたとき、一九三〇年代のような滅私奉公の時代となつたことはすでに述べました。ですから、そのような考え方によって、コミュニケーションを通しての合意形成の道を閉ざすことがあつてはならないのです。

D ここで、こうした近代日本の伝統とともに、公共的なコミュニケーションにとつて重要な、トウヨウのある伝統的思想をみなさんにぜひ覚えてほしいと思います。それは、⁽⁴⁾ 「和して同ぜず」という思想です。こ

これは孔子の『論語』(子路第二三)に出てくる格言で、みなさんもすでに知っている言葉かもしれませんが、活私開公型のコミュニケーションにとって重要なので、あらためて説明してみましよう。

『論語』に出てくる正確な言辭は、「君子は和して同せず、小人は同じて和せず」です。これは、「意見が他の人とちがっている場合、人格が立派な人は、その人と敵対せず、またおもねって同調することもしない。しかし、徳のない人は、表向きは同調しながら、裏では敵対する」という意味です。

さらに同じ中国の古典『春秋左氏伝』(昭公二〇年)には、「和」は、いろいろな食材をうまく調和させてスープを作るようなもの、辛・酸・甘・鹹(塩辛い)・苦の五つの味を調えるように、異なるものを混ぜて調和させることであるのに対し、「同」は一つの味だけを集めることだと記されています。そして、★為政者と★臣下の関係もそれと同じだといえます。すなわち、為政者がそうだとえば臣下もそうですねと同調し、為政者がだめだといえればそれに黙って従うイエスマンの態度が「同」であると思なされます。それに対して、もし為政者の考えが間違っていると思えば、臣下は進言して、正しいものに変えることが「和」だとされています。このような「和」の態度によってはじめて、政治は平穩で礼儀に背かず、民に争奪の心がなくなるというのです。

私がこのような古い格言をここで引用するのは、どうしても同意できない意見の食い違いがあった場合、みなさんに「和して同せず」の態度をぜひとってほしいと思うからです。個性をもった一人ひとりの意見は多様なために、コミュニケーションしあっても、合意にいたらないことは多々あります。そのような時に、しぶしぶ同調しながら意見のちがう人の陰口をたたくというのは、「同じて和せず」の態度そのもので、潔くありません。そうではなく、互いに異なる意見をソンチョウウしあいながら、自分がどうしても正しいと思う意見は軽々しく譲らないという態度が「和して同せず」なのです。

(山脇直司『社会とどうかかわるかー公共哲学からのヒント』)
★自由民権運動……人々の権利や自由の拡大を求めて政治に参加しようとした明治時代の運動。

★大正デモクラシー……大正時代に大きくなった民主主義を重視する風潮。

★為政者……政治を行う者。

★臣下……君主につかえるけらい。

問一

——(1)「公共的なコミュニケーションは不可欠です。」とありますが、筆者の考える公共的なコミュニケーションの役割は何ですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問二

——(2)「この本が打ち出したい『活私開公』型の組織や社会」とありますが、これはどのような社会ですか。文中から抜き出して、十五字以内で答えなさい。

問三

——(3)「近代日本においてわき起こった自由民権運動や大正デモクラシーは、まさに、人びとが対等なたちでコミュニケーションをとりながら合意形成をめざす運動であった」とありますが、この具体例を通じて筆者が主張したいのはどのようなことですか。五十五字以内で答えなさい。(句読点を含みます。)

問四

——(4)「和して同せず」という思想」とありますが、この思想を讀者に紹介することで筆者が主張したいのはどのようなことですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問五

——(5)「春秋左氏伝」とありますが、ここにはどのようなことが書かれていますか。ふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 為政者と臣下の関係をスープに例えており、時には為政者に進言する「和」の考え方を持つ者がいてこそ、平穩な世が訪れるということ。

イ 「和」と「同」の関係をスープに例えており、「和」の心を持つ者が食材のごとく場を調和させてこそ、平和が訪れるということ。

ウ 為政者と臣下の関係をスープに例えており、為政者を正そうとする「同」の発想を持つ臣下がいてこそ、政治が穏やかなものになるということ。

エ 「和」と「同」の関係をスープに例えており、一つの味を集める「同」のように個人の才能が発揮されてこそ、嫉妬や争奪の心がなくなるということ。

問六

A D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選

び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア さて イ また ウ しかし エ たとえば

問七

—(ア)～(オ)のカタカナを漢字に直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つを選び、記号で答えなさい。

ア 人間が「身内以外の他者」との「あいだがらてき間柄的な存在」を生きる限り、
「社会で他者との衝突を回避するのためにもコミュニケーションは非
常に重要であり、これを怠ると滅私奉公や滅公奉私の考えに陥っ
てしまう。

イ 人間という生き物は「自分」と「身内以外の他者」をはっきりと
区別しているため、コミュニケーションによる合意形成は非常に
重要であり、これを怠ると争いや犯罪の絶えない社会が生まれて
しまう。

ウ 人間という言葉が人と人との「間柄的な存在」を表す通り、社会
生活を送るうえでコミュニケーションは非常に重要であり、これ
を怠ると誤解が生まれたり、疑心暗鬼に陥ったりすることになっ
てしまう。

エ 人間が一人では生きられない生き物である限り、他者と助け合う
ためにもコミュニケーションは非常に重要であり、これを怠ると
「身内以外の他者」を「赤の他人」として軽視する社会が生まれて
しまう。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

五月の終わり、千春がお店へ入るなり、おじさんのほうから聞かれた。

「今日はたまねぎか？」

よつぽどゆううつそうな顔⁽¹⁾をしていたらしい。

発端^{はつたん}は、週末に開かれた、サナエちゃんのお誕生日会^{たんじょうびかい}だった。千春と紗希もふくめ、クラスの女子の半分以上が招待^{しょうたい}されていた。

サナエちゃんから日程^{じつてい}を知らされるなり、紗希は悔^{くや}しそうに断^{ことわ}った。

「ごめん、あたし、行けない。塾^{じゅく}の全国テストなんだ」

「そっか。じゃあ、しょうがないね」

サナエちゃんも残念そうに答えた。怒^{おこ}っているふうには見えなかった。

でも、本音はそうじゃなかったらしい。お誕生日会の当日、集まったみんなの前で、サナエちゃんはおおげさにため息をついてみせたのだ。

「ガリ勉^{かりけん}つてやだよ。友だちより勉強^{けんぎょう}のほうが大事^{だいじ}つて、どうなの？」

サナエちゃんちの広々としたリビングが、しんと静まり返った。

お誕生日会の主役だから、反論^{はんろん}しづらいというだけではない。クラス委員をつとめ、先生からも頼^{たの}りにされているサナエちゃんは、**A** 者^{もの}で気が強い。堂々と反対意見をぶつけられるのは、同じくらい気の強い、当の紗希くらいなのだった。

それでも勇気を振りしぼって、千春は言い返した。

「だけど、紗希も来たがつてたよ」

本当のことだった。パーティーには参加できないかわりに、サナエちゃんのためにプレゼントを買って、休み明けに学校で渡^{わた}すつもりだと聞いていた。

サナエちゃんが⁽²⁾ あわれむような目で千春を見た。

「前から思ってたけど、千春ちゃんも大変だよな？ あの子、最近塾ばかりで、学校なんかどうでもいいって思ってるっぽくない？」

今度は、なにも言い返せなかった。それは千春も **B** 感じていることだったから。

紗希が塾通いで忙^{いそ}しくなってきたから、いっしょに帰ったり、遊んだりする機会はめっきり減^へっている。最近はずっと、宿題を写させてほしいと頼^{たの}まれるようになった。写させてあげること自体は、別にかまわない。これまで千春も、何度となく紗希に勉強を教えてもらってきた。ただ、こんな

30

25

20

15

10

5

宿題なんか意味あるのかな、とこぼされても、なんとも答えられない。

紗希に悪気がないのは、千春にもわかってる。悪気なく、学校の授業はたいくつだとけなし、塾の先生や友だちの話ばかりする。悪気がないとわかっていても、千春はなんだか **C** しない。

お誕生日会の翌日^{よくじつ}、紗希になにをどう伝えるべきかと千春は悩^{なや}んだが、その必要はなかった。

サナエちゃんの文句^{もんく}は、すでに本人の耳にも入ってしまったのだ。

お誕生日会に出席した誰^{だれ}かが、**D** 告げ口したようだった。

「こそこそ悪口言うなんて最低」

紗希は息巻^{いきま}いていた。

「あたし、別にガリ勉^{かりけん}じゃないし。将来^{しょうらい}のために必要なことをしてるだけだよ。いい学校を出て、いい会社に入って、いい人生を送りたいんだもん」

以来、紗希とサナエちゃんはひとことも口をきいていない。

紗希の味方^{あいて}につく女子もいて、⁽³⁾ 教室の中には冷たい風が吹き荒^あれている。どういうわけか、担任^{たんじん}の先生と男子たちは、まったく気づいていない。ぶりがなければいい。

千春の話⁽⁴⁾を聞き終えたおじさんは、低^ひくうになった。

「ややこしいことになっちゃまってるなあ」

そのとおりで。ものすごく、ややこしいことになっている。

「いわゆる価値観^{かちかん}の相違^{さうい}つてやつだ。小五でもあるんだなあ。そりゃ、あるか」

「カチカンソニー？」

またしても、千春にとってはじめて聞く言葉だった。

「生きてくうえで大事^{だいじ}にしたいのものが、ちがうつてこと」

おじさんが補^{おぎな}った。それなら、千春にもなんとなくわかる。

「有名な学校や大きな会社に入るのが、すごく重要^{じゅうよう}だつて考えるひともいる。そうじゃないひともいる」

正直^{しんじき}なところ、紗希の主張^{しやうちやう}を、千春も完全に理解^{りかい}できているわけではない。もちろん、「悪い学校」よりも「いい学校」で学び、「悪い会社」よりも「いい会社」で働くに越^こしたことはないだろう。でも、「いい人生」と言われても、それが具体的にどんなものなのか、どうもぴんとこない。

「価値観の相違^{さうい}つていうのは、おとなの世界でもよくあるんだ。それが原^{げん}

60

55

50

45

40

35

因でいろんな争いが起きてる。今も昔も、世界中でね」

おじさんは、うんざりした顔のため息をついている。

「友だちどうしのけんかだけじゃない。夫婦が離婚したり、国どうしが戦争をおっぱじめたり」

「せ、戦争?」

「うん、極端な例だけだな」

千春にも、ため息が伝染した。そんなにむずかしい話だったのか。

「じゃあ、どうすれば仲直りできるの?」

「きみはどう思う?」

聞き返されて、頭を整理してみる。紗希とサナエちゃんの価値観とやらが食いちがってしまっているのが、問題らしい。ということは、

「どっちかに考えを合わせればいいの?」

「それは無理だろうな」

おじさんが首を振った。

「え? でもさっき、価値観がちがうのが問題だって……」

「原因だって言ったんだ。問題じゃない。問題は(5)がいるってこと」
きっぱりと言う。

「別に、同じにしくたつていい。いや、すべきじゃない。みんな同じじゃ、つまらんからな。ほら、カレーだってそうだろう?」

「へ? カレー?」

「いろんな種類のスパイスを入れるから、味に深みが出ておいしくなる。カレー、作ったことないか?」

「あるけど」

去年、調理実習で作った。いろんな種類のスパイスなんか使わなかった。板チョコみたいなかたちのルウを砕いて、鍋に放りこんだだけだ。(6)おじさんのたとえ話は、たまにわかりにくい。

だけど今は、カレーの作りかたはどうでもいい。とにかく一番知りたいことを、千春はたずねた。

「だったら、仲直りはできないの?」

「いや、そうとは限らない。たとえばさっきの話だけど、きみはいい学校やいい会社に入りたい?」

急に話が飛んで戸惑いつつ、千春は正直に答えた。

「よくわかんない」

95

90

85

80

75

70

65

「ほら。きみの価値観と、その友だちの価値観も、ぴったり同じってわけじゃない」

「あ」

「だからって、その子も受験なんかやめちまえとは思わないよな?」

千春はこくりとうなずいて、でも、とつけ足した。

「ちよつとさびしい」

「そうか、そうだよな」

おじさんがつぶやいた。

「じゃあ、その子の受験がうまくいかなきゃいいと思う?」

「まさか」

そんなことは、思わない。クラスが上がったと報告してきた紗希のうれしそうな顔が、千春の頭に浮かんだ。

「そういうことなんだよ。価値観がちがったって、友だちでいられる」

おじさんが千春の顔をのぞきこんだ。

「認めればいい。自分とはちがう考えかたも存在するってことを。そのふたりも、おたがいを認められれば、仲直りできる」

「うん」

でも、どうやって?

「きみが手助けしてあげれば?」

千春の疑問を読みとったかのように、おじさんがにっこり笑った。

(瀧羽麻子「たまねぎとはちみつ」)

115

110

105

100

問一

——(1)「顔」とありますが、「顔」を使った次の一〜五の慣用語の意味を、後の「意味」ア〜オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 顔が売れる
- 二 顔がきく

三 顔がつぶれる

四 顔を立てる

五 顔をくもらせる

〔意味〕

ア その人の信用が保たれるようにする。

イ 心配そうな顔をする。

ウ はじをかく。

エ 相手に信用があつて、無理が言える。

オ 広く世の中に知られる。

問二

——(2)「あわれむような目」とありますが、サナエがそのような目で千春を見たのはなぜですか。解答らんに具体的に二行以内で答えなさい。

問三

——(3)「教室の中には冷たい風が吹き荒れている。」とありますが、これはどのような状態ですか。五十五字以内で答えなさい。(句読点を含みます。)

問四

——(4)「おじさんは、低くうなった。」とありますが、なぜですか。解答らんに一行以内で答えなさい。

問五

〔5〕に入れるのにふさわしい語句を次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア そのちがいを受け入れられない人間

イ 価値観を持つとうとしない人間

ウ 戦争を引き起こしてしまう人間

エ そのちがいに気がつかない人間

問六

——(6)「おじさんのたとえ話」とありますが、このことの説明としてふさわしいものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間をカレーのルーにたとえて、同じ人間ばかりでは世の中がつまらないということ伝えようとしている。

イ カレーのスパイスを人間にたとえて、カレーの味をよくするためする方法を伝えようとしている。

ウ カレーのルーを人間にたとえて、調理実習のように協力しあえる人間関係の大切さを伝えようとしている。

エ 人間をカレーのスパイスにたとえて、いろいろな人がいたほうがよいということ伝えようとしている。

問七

〔A〕〔D〕に当てはまる語を次のア〜エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア こっそり イ うすうす ウ すっきり エ しっかり

問八

本文の内容に合うものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 千春が、紗希とサナエが価値観をめぐって対立していることを、おじさんに話したところ、おじさんは、二人の価値観はちがっているようでも本当はほとんどちがっていないから、千春の手助けさえあれば仲直りはできると言った。

イ 千春が、紗希とサナエの仲たがいのことをおじさんに話したところ、おじさんは、戦争や夫婦の離婚を例にして価値観の相違で争いが生じることを説明したが、仲たがいの解決は相手の価値観に合わせることはないと語った。

ウ 紗希が学校よりも塾での勉強を重視するのは、将来の学校や会社、人生のことを考えているからであることを紗希から直接聞くことができたので、千春は自分が誤解していたことを納得し、紗希の価値観を理解できたと思った。

エ おじさんは、千春から紗希とサナエの仲たがいの話を聞いて、千春に価値観とは何かとか価値観の相違が争いをもたらすことなどを説明し、他人の価値観を変えるのはむずかしいが、千春が手伝えばきつとできるとはげました。

